

(様式2)

論文内容の要旨

論文提出者

人文科学研究科 言語文化 専攻

氏 名 早野 勇馬

論文題目

An Analysis of English Prepositions and its Application to English Pedagogy

論文内容の要旨

本論文では、さまざまな用法があり、さまざまな構文に現れる英語前置詞（以下前置詞とのみ記述）について統一的な説明をする。前置詞を扱う先行研究は数多く存在するが、前置詞を包括的に扱うものは大きく二つの立場に分けられ、本論文では、前置詞が現れる構文を検証することにより、立場を明らかにしていく。最終的には、前置詞の用法によって英語学習者が体系立てて英語前置詞を学ぶ手助けとなることを目指している。

前置詞を包括的に扱っているものとして、Tyler and Evans (2003) と Dwell (2007)がある。Tyler and Evans (2003)では前置詞は空間関係で、前置詞自体に動きがないものと主張されている。一方で、Dwell (2007)では前置詞は場所を表すものと、経路を表すものの二つがあると主張されている。

本論文では、前置詞句主語構文について考察し、前置詞倒置構文と比較をし、両者の前置詞句の主語性の違いを明らかにし、前置詞句と名詞句の類似性を示し、前置詞句主語構文の前置詞句が文法化しつつあることを示し、動きを表さない前置詞を特定する。次に、二重前置詞構文の中の「from + 前置詞」と共起する前置詞から、起点を特定しうる境界が明確な場所を表すものと起点を特定しえない境界が曖昧な場所を表すものを特徴づける。結果構文を用い、結果状態までの動きを表す前置詞を特徴づける。両方を表す前置詞については、NPN 構造を用い、動きを表す前置詞が動きを表さない場合には隣接の概念が関係することを示す。時間を表す前置詞については、コーパスを用いその目的語の性質から時間のフレームの中で使われることを示す。このように、構文を用い、前置詞の分類をし、包括的な説明を試みる。

以上、前置詞が現れる構造から、前置詞を特徴づけることによって、場所と時間を表す前置詞に分け、場所の中でも動きを表す前置詞と動きを表さない前置詞に分けることによって、体系立てて前置詞を説明できたと考えられる。

(800文字以下)